京都大学	博士(文学)	氏名	川　田　拓　也
論文題目	日本語フィラーの音声形式とその特徴について ― 聞き手とのインタラクションの程度を指標として ―		

（論文内容の要旨）

話し言葉では、会話の内容とは直接関係のない「えー」や「あのー」といったフィラーを始め、発話の繰り返しやつっかえといった非流暢性を示す要素がしばしば観察される。本論文では、中でも、一般に間投詞の一つとしてみなされる「えー」や「あのー」、「まあ」といったフィラーを取り扱っている。この論文の目的はフィラーの現れについて定量的かつ定性的な分析を行うことによって、話し言葉が使用される場における話し手と聞き手とのインタラクションの程度の違いが、現れるフィラーの形式の違いに影響を与えることを示すことにある。

日本語のフィラーの音声形式にはいくつかのバリエーションがある。例えば、ほぼ母音のみで構成されるもの（「あー」「えー」「うー」「おー」など）、指示詞と同形のもの（「あの（ー）」「その（ー）」、副詞と同形のもの（「まあ」など）がある。さらに終助詞や判定詞の後接が許される場合がある（「あのーですね」など）ため、実際に会話で現れる音声形式は多様である。

本論文では、このような自然談話中に現れるフィラーについて音声形式ごとに、生起しやすい環境もしくは、生起しづらい環境を特定することによって、フィラーの音声形式間の性質の違いを明らかにしている。特に論者は「聞き手との関わり」の程度によって特徴づけられる談話形態の違いに応じて出現しやすいフィラーの種類が異なっていることを示した。本論文における「聞き手との関わり」とは、話し手がどの程度聞き手の知識や態度、反応について留意しながら談話を進めているかの程度を表している。その結果、フィラーは、談話中において話し手が聞き手に対してどの程度関わっているのか（いないのか）に応じて、現れやすい音声形式が異なることが明らかにしている。

本論文の分析手法は次の通りである。まず、自然談話コーパスを用いて、フィラーの実態を明らかにした。用いたコーパスは次の 3種類に分類される。一つ目は講演など不特定多数の聞き手に対して一方的に情報提供を行う「講義・講演」形態に相当するコーパスを用いた。講義・講演では聞き手からの干渉はなく、話し手も聞き手とのやり取りを期待していないため、聞き手との関わりが低い談話形態である。次に話し手と聞き手が相互に情報を交換し、聞き手との関わりが強く求められる「対話」形態のコーパスを用いた。さらに、「ポスター発表」形態のコーパスを用いた。これは、話し手が聞き手に一方的に情報提供を行う形式ではあるが、聞き手は適宜干渉することができる。そのため、「聞き手との関わり」に関して言えば、講義・講演と対話の中間形

態であるといえる。

次に、ポスター会話形式のコーパスを用いて、話し手の視線とフィラーの同期を調べている。すなわち、話し手のフィラー発話中の視線方向について、フィラーの形式ごとの比較を行った。本論文では、Argyle and Dean (1965) やKendon (1967) の議論を基に、視線方向が聞き手にあるときは、その談話中において聞き手との関わりが強い状況であると考えている。

各分析結果は次の通りである。各談話形態におけるフィラーの種類と表出数を調べた結果、フィラーの種類は多様ではあるが、概ね「え」を初頭に持つ「え」型フィラー、指示詞と同形の指示詞型フィラー、副詞「ま（あ）」と同形の「ま」型フィラーの三種によって占められていた。

「え」型フィラーは「対話」において頻度が低く、また、「え」型フィラーの表出時には聞き手から目がそれている傾向がある事が観察された。その点において、「え」型フィラーは聞き手に対して働きかけるような状況で表出されることが少ないことが示唆された。

指示詞型フィラーについては、談話の形態に関わらず平均的に表出されており、視線との同期に関しても「え」型フィラーと比較すると、聞き手に対しても視線が向けられていた。そのため、指示詞型フィラーは「え」型フィラーとは異なり、必ずしも聞き手との関わりが低い環境で現れるとはいえないことがわかった。実際「あのー」などが依頼の場面などにおいて、思考状態にあることを聞き手に演出する用法が認められることからも、聞き手に対する何らかの働きかけが求められる状況でも使われる音声形式であることが分かった。

「ま」型フィラーは講義・講演と比較して聞き手との関わりが強いポスター会話で頻出していた。一方で、話し手の視線は聞き手から外れる傾向にあり、「え」型フィラーと共通していたことから、聞き手との関わりが低い状況で現れやすいことが示唆される。この二つの観察結果は一見矛盾しているように思われる。そこで、副詞としての「まあ」の性質を記述し、フィラーとしての「ま（あ）」との振る舞いとの関連を調べた。副詞的な「まあ」は以下のような例が相当し、緩和表現的に振る舞うことが指摘されている（川上1994，富樫2002）。

（1）a. あいつは彼となら、まあ、うまくいくだろう。

b. A：太郎って賢いよね。B：まあ、そうだね。

本論文では、まず、「まあ」の副詞的な振る舞いを整理し、「まあ」がスケールを持つ表現と共起するとscalar implicatureのキャンセルが制限されるという観察を得た。その結果「多く見積もって…」のような消極的評価としての意味合いを帯び、発話行為と共起することで、「まあ」が緩和表現的な振る舞いを見せることを示した。緩和表現的に振る舞う「まあ」は、文末形式との共起関係を観察することで、聞き手と情報を共有できる環境で用いることができず、話し手しか知り得ない話し手の判断や未来

的状況が述べられる時に現れうることを指摘した。この性質は対話の種類ごとに観察した「ま」型フィラーでも見られた。話し手が聞き手に未知の情報を提供するインタビューのような状況で「ま」型フィラーはよく見られる一方で、話し手と聞き手が相談しあうような状況では「ま」型フィラーがあまり見られなかった。この結果は、ポスター会話のような話し手が眼前の特定の聞き手に対して説明をするような状況で頻出した結果と矛盾しない。このことから、「まあ」は話し手が聞き手に未知の情報を提供する際に現れるという点において副詞的な「まあ」と「ま」型フィラーは共通しており、その点において両者には連続性があることがわかった。

次に本論文が、これまでのフィラーの研究において果たした貢献について述べる。本論文で示したことは、直感的には明らかな結果ではある。例えば、定延・田窪(1993)が指摘するように「えー」は独り言で表出されやすいが、「あのー」は「えー」と比較すると独り言では現れにくいという直感から、「え」型フィラーと指示詞型フィラーの差異を感じることはできる。本論文は三種類のフィラーに対する認識を大きく変えるような観察結果は提出していない。しかしながら、次の三点において、本論文はフィラーの研究に対して一定の貢献を果たしたように思う。まず大量でかつ、収録状況や、条件が均質なデータを用いてフィラーの実態を明らかにした点が挙げられよう。これまでも談話の形態に応じたフィラーの観察は行われてきた(山根 2003, Watanabe 2009)。ただし、本論文は対話、講義・講演および、その中間的位置づけに当たるポスター会話を比較することで各フィラーの音声形式間の分布の違いを示した。第二点目としては、話し手の視線のような、非言語情報とフィラーを関連づけ、直感に沿った結果を得ることができたという点が挙げられる。フィラーは音声的なジェスチャーであるという主張（田窪 1995, Schourup 2001）という点からも、今後フィラーと身体動作をはじめとする非言語情報がどのように関わっているか考察することで、新たな知見が得られる可能性がある。視線との関連はその文脈において一つの貢献であると考えられる。第三点目としては、これまで副詞としてもフィラーとしてもあまり研究蓄積のなかった「まあ」について一定の記述を与えたという点が 挙げられる。「まあ」に対してスケールに作用するという記述を与えることで緩和表現的に振る舞うというこれまでの記述に根拠を与えた。さらに「まあ」がポスター会話で頻出するという自然談話コーパスからの結果と整合する記述を与えたという点が挙げられる。

最後に本論文における課題について述べる。本論文はフィラーの形式ごとの分布の差異について明らかにしたが、なぜ聞き手とのインタラクションの度合いに応じてフィラーの分布が異なるのか、その理由に関する考察は不十分であった。また、通言語的な考察も不十分であった。例えば、日本語では指示詞型のフィラーが存在するが、英語のように指示詞型のフィラーが存在しない言語もある。どのような言語形式がフィラーになりうるのか予測する理論を構築する上でも、今後通言語的な視点は不可欠である。

（論文審査の結果の要旨）

本論文では、一般に間投詞の一つとしてみなされる「えー」や「あのー」、「まあ」といった音声的表出を扱っている。これらは意味のある表現を発出するまでのいわば埋め草として現れるものとして、フィラーと呼ばれるが、従来は、非流暢性を表す無意味なものとして言語研究では無視されるか、軽視されることが多かった。近年、このようなフィラーが、発話者の発話操作に際しての心的状態を表すものとして注目され、多くの研究がなされるようになった。しかし、それらの多くは印象的、直感的なもので、綿密な観察に基づいた定量的研究はほとんどなかった。本論文はフィラーの現れについて大量のデータベースを使い、定量的かつ定性的な分析を行った先駆的な考察である。

論者の主張は、話し言葉が使用される場において、話し手が聞き手をどのように意識するかという、話し手の聞き手とのインタラクションの程度の違いが、現れるフィラーの形式の違いに影響を与えるというものである。

論者は話し手と聞き手とのインタラクションが異なる３種類の自然談話コーパスを用いて、フィラーの現れを観察している。一つ目は講演など不特定多数の聞き手に対して一方的に情報提供を行う「講義・講演」形態に相当するもので、話し手の聞き手とのインタラクションが低いもの、次が「対話」形態のコーパスで、話し手の聞き手とのインタラクションが高いもの、さらに、これらの中間と考えられる「ポスター発表」形態のコーパスを用いている。

自然コーパスデータの中のフィラーとみなせる要素の網羅的リストの生起から、その70％を次の３種類のフィラーが占めることがわかった。「え」を初頭に持つ「え」型フィラー、「ああ、そう、こう」などの指示詞をもとにした「指示詞」型フィラー、副詞「まあ」から転じた「ま」型フィラーの３種類である。

論者はまずコーパスデータベースでこれら３種類のフィラーの使用がどのような談話形態と相関するかを調べた。次に、ポスター発表形式のコーパスを話し手の視線とフィラーの同期を映像編集ソフトによってコード化し、その計量データを取って、話し手のフィラー発話中の視線方向について、フィラーの形式ごとの比較を行った。

その結果、「え」型フィラーは「対話」において頻度が低く、また、その表出時には聞き手から目がそれている傾向がある事が観察された。したがって「え」型フィラーは聞き手に対して働きかけるような状況で表出されることが少ないことが示唆される。

指示詞型フィラーについては、談話の形態に関わらず平均的に表出されており、視線との同期に関しても「え」型フィラーと比較すると、聞き手に対しても視線が向けられていた。そのため、指示詞型フィラーは「え」型フィラーとは異なり、その使用は聞き手との関わりが低い談話環境で現れるとはいえないことが判明した。

「ま」型フィラーは講義・講演と比べると聞き手との関わりが強いポスター会話で頻出している一方で、視線に関しては話し手の視線は聞き手から外れる傾向にあるこ

とがわかった。この二つの観察結果は一見矛盾しているように見える現象である。このため、論者は副詞としての「まあ」の性質を考察し、それをフィラーとしての用法に拡張することで説明を試みた。

副詞としての「まあ」は、ある要素に付加されることによって、その要素の持つスケールの上限が明示され、その結果「多く見積もって」という含意を生じさせる。論者は、この性質のため、「まあ」は、聞き手と情報を共有できる環境で用いられることができず、話し手しか知り得ない話し手の判断や未来的状況が述べられるときに現れると予想し、これをデータベースの精査により示した。さらに、この性質は「ま」型フィラーでも見られた。話し手が聞き手に未知の情報を提供するインタビューのような状況で「ま」型フィラーはよく見られる一方で、話し手と聞き手が相談しあうような状況では「ま」型フィラーがあまり見られないことがわかった。これは、ポスター会話のような、話し手が眼前の特定の聞き手に対して説明をするような状況で頻出するという結果と相関し、ポスター会話における「ま」型フィラーの分布が説明できる。

本論はフィラーの生起環境と談話形態との相関関係を定量的に明らかにした最初の論文であり、また、話し手の視線のような、非言語情報とフィラーとの相関を見た点で画期的なものということができる。

しかし、いくつかの点で問題もある。まず、副詞「まあ」の「多く見積もって」という含意と話し手が情報を専有している場合に使用されるという性質との関係はかならずしも明示的に示されていないため、論証が十分であるとはいえない。また、ここで扱っているフィラーは3つにすぎず、提示されている記述がフィラー全般に関する理論に拡張できるかどうかは未知数である。詳細なデータ分析はあるが、フィラーとはそもそもなんなのかに関する考察も多少不足していると言わざるをえない。しかし、これらは実証的研究としての本論文の価値を大きく減ずるものではなく、その解明は今後の課題である。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2010年4月5日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。